第 4 回留学レポート

法文学部社会文化学科 4 年　新田欧介

〇最近の暮らしと所感

2 か月もあったはずの春休みがあっという間に終わり、4 月 17 日から夏学期が始まりました。3 ヶ月後には再び日本語が普通に使える日常が戻ってくると思うと嬉しい気もしますが、モラトリアムから抜け出して愈々現実と向き合わなければならないことを思うと悲しくもなります。ただ、それも含めてすべて自分で決めたことなので温いことを言わずに、若い時間と支えてくれる人たちに感謝しながら毎日楽しんで生活していきたいです。

春休みに集中講義を受講して極端にさぼることはなく、クラスのレベルも順調に上げることができているのですが、まだまだ勉強が足りないと感じることばかりなので残りの数ヶ月でおなか一杯になるまでドイツ語を学んで帰れるように頑張ります。変わらずそれが今の自分の第一の責務だと思いますし、帰国後にドイツ語検定やゲーテを受験して目に見える形でその証が残れば重畳かなと考えています。

今学期は前学期とは違い、クラスのレベルが上がった影響（名目上は B1 レベル）で語学中心ではあるものの、履修できる授業の幅が増えました。通常のドイツ語コースに加え、自分の専攻である歴史学、中級者向けの作文クラスやリスニングクラス、会話クラスなども受講しているので毎日それらの課題を必死に片付けています。また、これまで同様に複数人とタンデムを行っているほか、余った時間を使って興味のあるドイツ語で書かれた歴史雑誌や漫画を翻訳しています。似た表現のニュアンスの違いや辞書に載っていないドイツ語（特に口語表現）については Japanologie を専攻している友人に聞くと教えてもらえるので、多少難しくても楽しみながらコツコツやり続けています。雑誌に関しては 1 冊のものをずっと読んでいるのですが、終わりが全然見えないので日本に帰ってからもやり続けると思います。

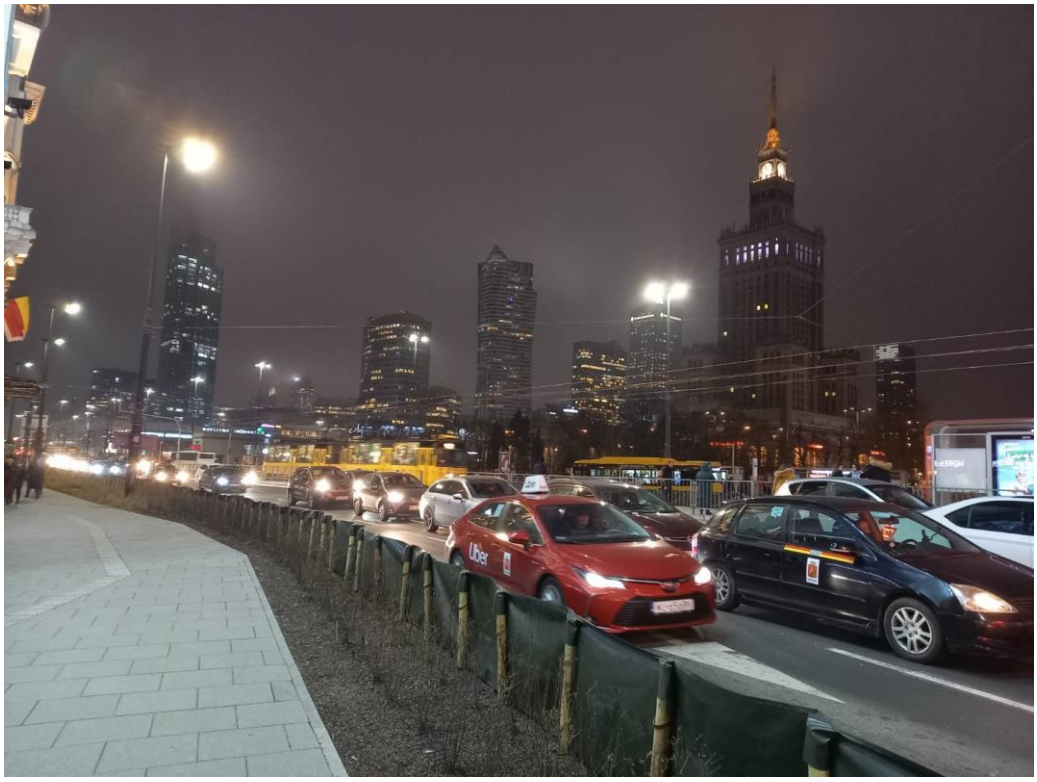
〇春休み中の旅行（前半）

春休み中はドイツから見て東側の地域を 2 回に分けて旅行してきました。1 回目に行った地域はポーランドの 2 都市とベルリンで、9 日間ほどの一人旅となりました。特に印象に残っているのはポーランドです。ヨーロッパの旅行先で比較的マイナーと考えられているポーランドに行った理由は、どうしてもアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所に行きたかったからです。私は歴史学を専攻していてその分野に興味があるというのも大きいですが、現代人の 1 人としていつか必ず行くべきだと考えていたので、今回の旅は自分にとって非常に貴重な経験となりました。アウシュヴィッツまでは近隣の都市であるクラクフからバスを使って 1 時間半で行くことができ、当日は現地に住む日本人で唯一公認のガイドとして働いている中谷剛さんに 2 つの収容所を案内していただきました。人々を収容していた建物が今も多く残るアウシュヴィッツには収容者から刈り取った大量の髪の毛や積み重ね

られた靴や鞄などが展示されていて、自分と同じ人間が過去に行った残虐な行為に強い恐怖を感じました。ただ、私がどのような展示よりも印象に残っているのは、連行されてきた人々が最初に『選別』を受けたビルケナウ収容所の敷地があまりにも広かったことです。ビルケナウ収容所は近くに位置するアウシュヴィッツ収容所に比べて現存している建物が少なく見通しがきくのですが、それがかえって大量殺戮を行った場所の広さを際立たせているように感じ、やけに晴れ渡る空と相まってどうしようもないほど悲しくなりました。

多くの負の歴史を抱えた場所ではありますが、若いうちに行けて良かったなと感じています。年を取って様々な経験を積み、理解を深めたあとには今よりもう一段深い見方ができると思うので、将来まとまった時間が取れたらもう一度行きたいと考えています。

上）有名な Arbeit macht frei の標識、下）ビルケナウ収容所に続く線路



上）破壊されたガス室

下）夜のワルシャワ

〇春休み中の旅行（後半）

春休み中のもう一つの旅行先はオーストリア（ウィーン、グラーツ、ザルツブルク）とブダペストでした。ウィーンについては個人的にハプスブルク家の大ファンということもあり、留学前から絶対に行くと決めていた場所だったので、実際に訪れたときに感じた喜びは格別でした。ICE（日本の新幹線のようなもの）の停まるコブレンツから乗り換えなしで 8 時間列車に揺られて着いたウィーンの街並みは今まで見たどのヨーロッパのものよりも美しかったです。ウィーンでは途中グラーツに行った日を含めて 5 日間ほど滞在したのですが、町のどの部分を見ていても長い間紡がれてきた歴史を感じられ、『破格の首都』という言葉が自然と思い浮かびました。シェーンブルン宮殿やホーフブルク宮殿をはじめとする文化遺産の壮麗さは、かつて帝都であったこの町ならではのものだろうと思いますし、それらが現在も綺麗な形で残っているのは歴史好きにはたまらないものでした。

余談にはなりますが、トリーアに戻ってきて同じく春休み中にウィーンに行ったドイツ人の友人と話したところ、「ドイツ文化」の首都はベルリンではなく、ウィーンだという意見が一致しました（彼自身はベルリン出身）。些細なことかもしれませんが、個人的にはドイツ人の感性に少しでも近づけたような気がして嬉しかったです。また、ドイツから見て東側の地域にばかり行っているので、最近は彼から名前をもじって「東欧介」と呼ばれもします。個人的にはエキゾチックで悪くない響きだと思うので気に入っています。

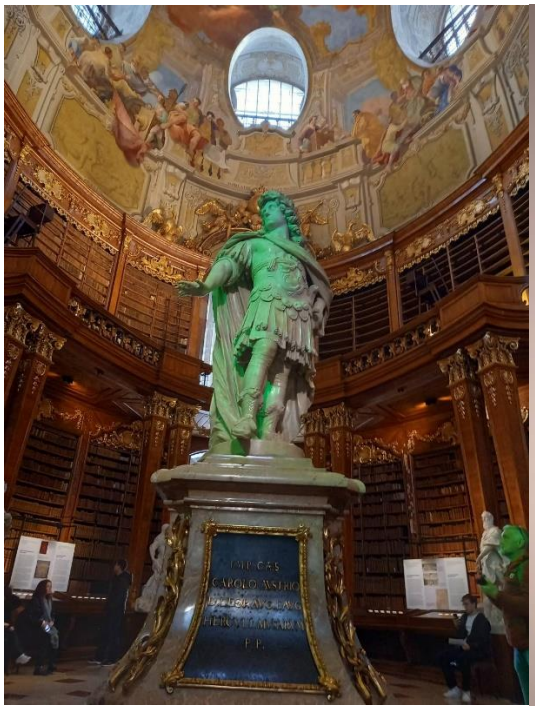
本場の Wiener Schintzel

シェーンブルン宮殿

左）デューラーの『マクシミリアン 1 世像』　右）アンチンボルドの『火』

ベルヴェデーレ宮殿

グラーツの市庁舎とヨハン大公像

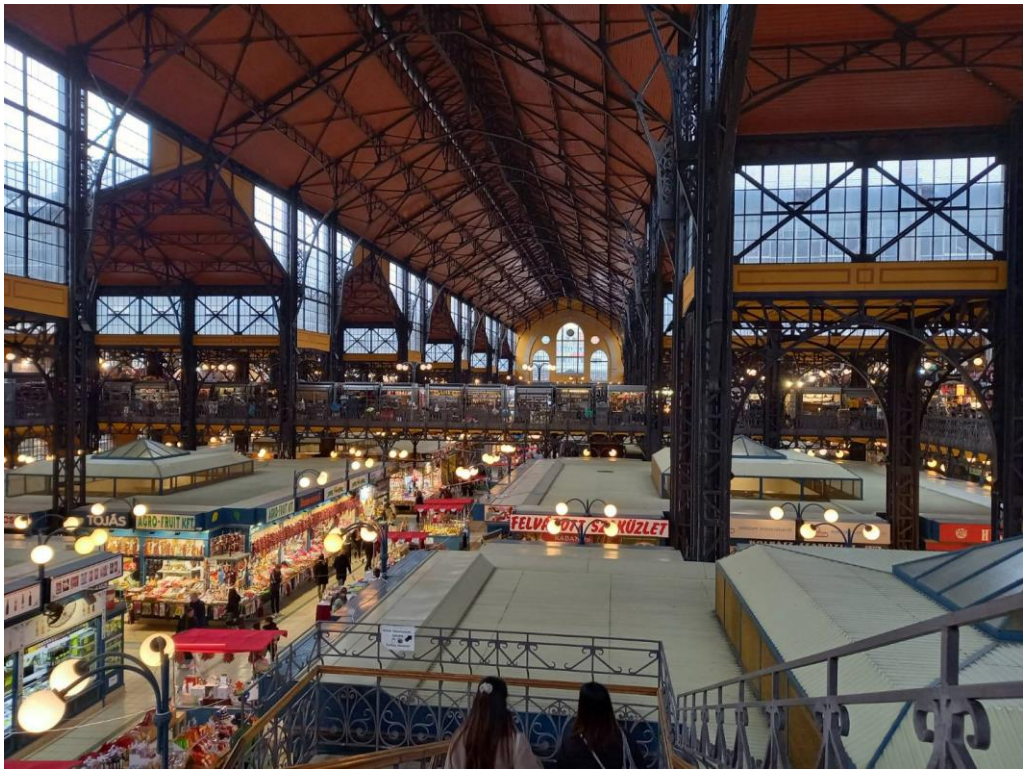


左）オーストリア国立図書館　　右）クリムトの『接吻』

ブダペスト名物のフォアグラ

ハンガリーの国会議事堂

ブダ城から望むブダペストの風景



ブダペストの中央市場

ホーエンザルツブルク城

軽めの電車の遅延には慣れてきました